

## 雑事記 (30)

### 戦争遺跡探訪 (7)

また戦争遺跡や遺物のいくつかを見てきたので報告しよう。①～②は東京で、③が千葉県、その他④～⑩が神奈川で見たものだ。

#### ①ゼロ戦と彗星・靖国神社遊就館

東京・九段の靖国神社・遊就館は、なかなか見ごたえがある戦争博物館になっている。第二次世界大戦の日本軍の兵器(原則的に実物あるいは復元したもの)が多く展示されている。玄関フロアにあるゼロ戦や大砲を見るだけならただで入れる。そのゼロ戦(零式戦闘機五二型)の流麗な機体は、修理復元されたもので、よい状態に仕上げられている。遊就館では、他の兵器もよく修復され、原型が保たれている。

ただし、黒い蒸気機関車がこの同じフロアに置かれている意味はわからない。戦争に関係ないものだろう。鎮魂・愛国心うんぬんはともかく、兵器に関心がある者ならば、高額な料金を払って中をじっくり見たいところだ。



遊就館の玄関フロアにあるゼロ戦  
二階から眺める機体は一味違う

盛丘 由樹年

2018年8月14日、私は中まで入った。実はそれまで数回来たが、私も入り口だけの客の一人だった。この日は、翌日にひかえた終戦記念祭典の準備がされていた日だったためか、見物客も比較的多かった。



艦上爆撃機「彗星」  
(空母搭載型の攻撃機)

メインの大ホールには、戦車、潜航艇、各種兵器などが盛りだくさんに展示されている。私的には彗星の雄姿が興味深かった。ドイツ・ダイムラーベンツ社の設計を基にして国産化された液冷倒立V型エンジンを備え、スピード感と力強さのある機体だ。しかしながら、当時の日本ではエンジン製造技術・材料調達に問題があり、オリジナルの性能にとどくものは作れなかった。

昭和19年ごろから新鋭機として戦線に投入されたが、同年6月のマリアナ沖の航空戦では、アメリカ軍の艦載機グラマンF6Fなどにばたばたと撃ち落された。爆弾を抱えた爆撃機では、戦闘機に太刀打ちできなかった。アメリカ軍からは「七面鳥狩り」と揶揄された。圧倒的な戦力の差を見せ付けられ、日本側は残存の主力空母を失うなど、航空戦力に大きな打撃を受けた。

彗星には、B29迎撃のために夜間戦闘機に改造された機体もあった。生き残った者たちの証言記録\*1を読むと、それなりの戦果を上げたようだ。

この機体は、ヤップ島（ミクロネシア連邦）の飛行場の周辺に放置されていた複数の機体の部品を寄せ集め、有志たちが1980年に復元したものである。

その写真には、究極の特攻機「桜花<sup>おうか</sup>」も写りこんでいる。天井近くに吊るされている。現代の巡航ミサイルに形も用途も似ているが、桜花には人が乗って操縦することに大きな違いがある。

桜花は、戦況が末期的になった1944年に急遽、製造が開始された。32kmの射程距離に入るまで、爆撃機（一式陸攻）に吊るされて運ばれる。その母機から切り離されると、ロケット推進で加速し、目標の艦船に突っ込む。機首に積め込まれた1200kg爆弾が炸裂するしくみだった。しかし、射程距離に近づくまでに、母機もろとも撃ち落される運命にあった。

そのスピードと破壊力のある弾頭に脅威に感じたアメリカ軍が必死になって母機を撃ち落とすと伝えられている。母機となるべき一式陸攻がほとんど撃ち落され、基地に帰還できなかつたものだから、飛び立てなかつた桜花が、終戦時に数多く残つたといわれている。

この部屋には、ほかに「人間爆弾」のいくつかが展示されている。人間魚雷「回天」や、ボート爆弾「震洋」だ。そうそう、訓練中に死亡事故が多発したといわれる人間機雷「伏竜」も展示されていたと記憶している。少々気が重くなった。攻撃する側も、され

る側も、たまつたものではない。

そして特攻する兵士たちはすべて自ら志願した形になつていたことに私は注目したい。その出撃を命令した軍の司令官たちとしては、遺族からとやかく言われる筋合いではないわけだ。

## ② 近衛師団司令部庁舎・国立近代美術館工芸館

北の丸公園の一隅にある、この建築物が何ともすばらしい。貴族の邸宅的で、クラシックなゴシック様式だが、古さを感じさせない華麗な建屋だ。国立近代美術館工芸館として活用されているが、その昔、泣く子も黙る近衛師団司令部だった。竹橋近くの国立近代美術館の本館からやや離れているが、ついでに訪れて一見する価値がある。観覧券も共通になつていたと思う。近衛師団とは、天皇と宮城（皇居）を警備する軍人たちであり、誇り高いエリート集団だったという。その役割は、現在皇宮警察本部に引き継がれている。

明治43年（1910）3月に作られた。関東大震災や戦災にも耐えた。戦後、取り壊される話があつたが、建築物として貴重であり、昭和48年（1973）に耐震工事がなされ、重要文化財の指定を受け、保存されることになった。



近衛師団司令部庁舎  
2018年8月14日に撮影

③ 地下壕・赤山地下壕

千葉県館山市の赤山地下壕には、私は2回訪れた。単独で探訪したときと、団体旅行で訪れたときだった。団体旅行では複数の目的地を巡るもので、ここはその

一つに含まれていた。2度も見るのにはやや抵抗感があったが、「サイハテツアー・房総素掘りロード」とタイトル名の付いた団体旅行に参加した。



赤山地下壕入口付近  
団体客がぞろぞろと入ってゆく

2017年4月16日、私はその団体客の一員として赤山地下壕に入った。ここは館山市の「名所」のひ

とつになつており、観光地化されているから、予約なしで見学できるのはうれしい。幾多の鍾乳洞見物と同じ要領だ。入場料を払い、用意されたヘルメットをかぶって中に入る。単独で探訪したときには、案内人が付かず、自由に見て回れたと記憶している。



赤山地下壕内  
地層の褶曲しゅうきよく模様が美しい

中はトンネル構造であり、比較的広い通路が作られている。複雑な分岐点や怪しい地下室があるから、迷路のようでもある。周囲に見とれていると、たどってきた道を忘れ、帰れなくなる不安を持つが、基本的に、中の標準ルートを回れば、元の道に戻れるしくみになっている。

ここは旧海軍館山航空隊の防空壕として、館山湾の海岸沿いの基地（今は海上自衛隊の館山航空基地になっている）から約300メートル南にある赤山（標高60メートル）の中に建設された。1930年代に基地機能の一部として作られた。空襲が始まった1941年から基地の主要部分を移転しようと拡張工事がなされたが、終戦で未完成に終わったとある。未公開部分を含めると全長は1.6キロあるというから、規模が大きい。

#### ④ 防空壕・松永記念館

箱根板橋駅から北西に約500メートルのところの小田原市が管理する松永記念館がある。この辺は、その昔、閑静な別荘の多い地域だった。松永記念館もそのひとつであり、大きな池のある庭園や美術品の展示施設をもつので、私は数度訪れたことがある。

松永記念館は、日本の電力王といわれた松永安左エ門（1875～1971）が晩年に隠居生活を送ったところだそうで、その名が付けられている。彼は「電力の鬼」とも呼ばれ、それまで水力をメインに構成していた日本の発電システムを火力中心に推し進めた実業家だった。



老樗荘の背面の壁にある防空壕  
2013/2/22 撮影

裏の斜面を上って行くと、奥に老樗荘がある。離れ家的な建物であり、茶室を備えた趣のある日本家屋だ。室内を無料で見学できるから、建築に興味がある人にとってはうれしい。

この背後の切り立った崖面に横穴がある。二つの入り口が見える。垣根で仕切られているから、一般には公開されていないが、垣根越しに入り口を観察できる。こういったものは防空壕かどうか見分みわけけがつきにくいものなので、私は気になっていた。最近、防空壕と知った。個人用に造った防空壕で、空襲に備えたものだ。

#### ⑤ 防空壕・大船・大長寺

湘南地方には戦時中、寺の裏山に防空壕（坑道）が掘られたという例がいくつかあり、その一例に大長寺がある。

大船駅から、東に1.5kmほどのところに、大長寺があり、西側の裏山に防空壕が一つ残っている。当時は複数あったらしい。

私は2016年12月3日に、本郷台へ行くついでに寄ってみた。この防空壕は目立たないが、墓地へと続く道の脇、すぐ左側にあるから、発見するのは比較的容易だった。大船・鎌倉地区によくある「やぐら」

のようにも見えるが、兵隊が掘ったものという。洞窟  
陣地とも言えそうだ。



大長寺の防空壕。入り口付近には足の踏み場がないほどゴミがある。

しかし、入り口付近にはゴミが多く投棄されている  
から、奥に入っていくのは気が引けた。中に入った先  
人のレポートでは、「ゴミは10メートルほどで途切  
れる。坑道は三回クランクして30メートル奥で閉塞

していた」というから、その通りなんだろう。ゴミが  
不審者の侵入を阻んでいる。



⑥トンネル・藤沢・新林公園

新林公園、高さ1.8メートルほどのトンネル。  
中にかすかな光が見えるところが向こうの出口。  
2013/1/2 撮影

藤沢駅から南東1kmほどのところに、広々とした新林公園がある。雑木林の多い、なだらかな丘陵が、市街化の波を受けずに残っている。

その中の旧小池邸（かやぶきの古民家、内部の見学可能）の裏手に怪しいトンネルがある。ネット情報によると、戦争中に本土決戦に備えて兵隊たちが掘ったものというので、私は6年ほど前に見に行った。このトンネルは、裏山を貫いた30メートルほどのもの、川名森久地区とを直結し、人が通行できるほどの広さがある。しかし、今は、双方の出入り口は柵で囲われているから、一般人が通行することはできない。ここにトンネルを作る必要性は低いと思われるが、兵隊たちは非常用、防空用として掘ったものだろう。それとも「穴掘り訓練」のためだろうか。

一般向けの説明では、このトンネルは公園内にある川名大池の水を農業用水として使うために作ったとしている。確かに、トンネル内の側溝に少量の水が流れているのだが、農業用水のためなら、この大きさは必要ないから、その説明は疑わしい。

古民家周りの斜面には、古代の横穴墓もいくつか見られるので興味深い。さらに情報によると、この公園の雑木林の中には、本土決戦用に掘られた別の横穴が

いくつかあるという。公園の管理者としては、秘密にしておきたいのだから……。中を荒らされたり事故（落盤など）になっっては困るから、そんな穴は基本的に埋め戻しているのだが、いつしか土砂がはがれたりする（はがされたりする）。



新林公園・横穴（洞窟陣地）

土嚢や木材で入り口がふさがれているが、一部が開いている。2019/2/24 撮影



後日（2019年2月24日）私は新林公園を再訪し、よく見て回った。確かに、丘陵地帯の遊歩道を歩くと、その側辺にもそれらしい横穴や、竪穴（一説に、動物を狩猟するための落とし穴だとあるのだが、私は塹壕に見える）がいくつも見られた。さらに、冒険広場の上方にある展望台（海や藤沢市街が一望できる）のすぐ近くには、コンクリート構造物があった。軍事施設の遺構のようだが、おそらく給水タンクを置くためのものだろう。

#### ⑦地下工場・芹沢公園

座間市の芹沢は谷間状の低地であり、散策するのにちょうどよい公園になっている。戦時中に、その斜面から横穴を掘って、碁盤の目状に地下壕が作られた。隣にあった「高座海軍工廠」が、空襲にさらされ、被害が大きくなる懸念から、工場設備を地下に移すため、ここに大規模な地下空間が作られた。工場設備を地下に移そうとしたのは、ほかに、吉見百穴（埼玉県吉見町）や浅川地下壕（東京都八王子）の例がある。いずれも、航空機製造に関する工場だった。そして、その土木作業のために朝鮮人たちが駆り出されたという話が付きまとう。私は5年以上前に前にも、芹沢公園と

その周辺には朝鮮人労働者が掘った地下壕があるという情報を得ていたから、一度訪れた。その地下壕は確かに残っており、入り口の横穴が遊歩道からみくつか見られた。ただし、それらの多くは、土砂や枯葉などで隠されるように覆われているから、わかりにくかった。なお、戦後、高座工廠の跡地の一角は、日産自動車の工場が建てられた。航空機の製造設備を自動車用に転換した例が多い。

座間市が今般、外から見学できるように整備した。そんな戦争遺跡を残す配慮があるのは、うれしい。中に入ろうとする者が後を絶たず、管理上悩まされていた市が「それなら、見せてやろうじゃないか」と開き直ったかのように公開したものと、私は考えている。そのことが地方版の新聞記事（毎日新聞朝刊2018/1/16 神奈川面）になったから、私はそれを知って、早速2018年12月16日に、相武台前駅から歩いて行った。

その新聞記事の中で、当時の高座海軍工廠には台湾から来た少年工たち（別の情報では約8000人いたという）が働いていた記述にも関心をもった。彼らが航空機の精密な部品を作れたのだろうか、と私は少々偏見の目で見ってしまう。

目当ての場所に着くと、整備されたという入り口には、厳重な鉄製の柵が設けられ、中には入れない。しかし、柵の隙間から、中を覗けるようになっていた。その地下空間の一部だけに照明をつけて、中の状態を見せるようにしている。まっすぐな坑道は、どこまでも続くようで、奥行きが非常に深い。土（古い火山灰



地下工場の入口  
柵の外から中をのぞき見る



地下壕の中には、戦闘機（模型）が置かれている

が固まったもの）を掘り出したものだから、比較的簡単に掘り進めたものかもしれない。  
壕内の中ほどに「雷電」戦闘機が置かれているのは、なかなかしやれている。ただし、幅3メートル・高さ3メートルほどの地下壕では、実物大の雷電が中に収まりそうにないから、うそっぽい気がする。本物ではなく、模型（1/5のスケールか）だ。要は、この地下壕で、雷電の部品を製造しようと言いたいのだろう。

雷電は、強力なエンジンと攻撃力を備えた局地戦闘機に分類される海軍機\*2だった。トラブル続きで開発が遅れ、ようやく実用化されたときには、本土が空襲の危機にあった。爆撃機B29の迎撃に期待されることになった。

この近辺にある厚木基地にも配備された。そこで「三〇二空」部隊が帝都防衛のために、それなりに奮戦した記録がある。しかし機数の確保が難しく、稼働可能な機体にしても、その多くが昭和20年の5月初旬には九州方面の他の部隊に引き渡されたという。沖縄戦（同年6月末まで続いた）に狩りだされた。帝都防衛より大事な任務だったことになる。

その期待は重すぎたようだ。ずんぐりむつくりの機体はバランスや操縦性が悪かったし、高出力を狙ったエンジンに故障や不調が飛びぬけて多かった。原因不明の事故や墜落が相次いだという。急発進のためにエンジンに相当負担がかかったものとみえる。（開発して間もないエンジンには不具合が付き物だったが、それにしても……）

そもそも、B29の大群に立ち向かえるだけの、数が作られなかったし、搭乗員の訓練不足もあった。はるか高空を行くB29の機影を発見してから飛び立つ

ようでは、ぜんぜん遅かったわけで、日本の貧弱な防空監視体制では後手を引いた。さらにB29に護衛のための強力な戦闘機がつくようになってからは、迎撃にはさらに困難がつきまとうた。

結局、雷電やその他の新鋭機（飛燕、紫電改、疾風など）が大戦の後期に登場したけれど、活躍する場が与えられなかったし、十分に活躍できる能力もなかった。

#### ⑧ P51プロペラ・横浜市歴史博物館

2018年12月24日に私は横浜市歴史博物館で歴史講座を聴講した。ついでに、企画展「横浜の記憶展」を見て回ると、プロペラの残骸が通路の片側に置かれていた。

このプロペラは、撃ち落されたアメリカ軍機のもので判明しているもので、今回の企画展のための参考出品であり、横浜市が所有者から一時的に借りてきたものらしい。2005年2月横浜市金沢区八景島沖で魚網に掛かり、その近くの柴漁港に陸揚げされたものだ。本来4枚一組のプロペラだが、各3枚が大きく折れ曲がり、一枚のプロペラは外れて散逸している。その状態をみると、海面に突っ込んだものだろう。



P 51 戦闘機のプロペラ残骸  
横浜市歴史博物館に展示されていた。  
海から引き上げられたものという

八景島沖というと、海軍追浜飛行場（今は日産追浜工場やテストコースになっている）にも近い海域だから、地上からの対空砲火によって撃ち落されたものだろうか、と私は想像する。なお、この海域には戦後、海に投棄された日本軍戦闘機の部品も数多くあり、そ

の一部が引き上げられることもある。

アメリカ側の調査も行われ、その形状からアメリカ軍の戦闘機 P 51 D ムスタングのものだと判明した。

1945年5月29日の横浜空襲の際に墜落した機体らしいが未確認だ。P 51 といえば、第二次世界大戦の戦闘機の中で最高の傑作機との呼び声が高い。よく訓練されたパイロットの、編隊を組んでの作戦行動は、向かうところ敵なしだった。

航続距離も長かったから B 29 爆撃機に随伴し、それを迎撃しようとした日本軍のかよわい戦闘機など、蹴散らした。相手がいないとなると、地上を目標にし、動くもの（人間を含む）には機銃掃射を浴びせまくり、その破壊力を見せ付けた。鉄道を行く列車など、格好のターゲットになった。近年テレビ放送されたドキュメンタリーでは「夢中で撃ちまくった」という意味のことを証言した操縦士もいた。

引き上げて数年後、戦死した一人の操縦士のためにアメリカ軍関係者の立会いのもと、慰霊祭が行われた。具体的にその氏名などは報道されていないが、アメリカ軍関係者には記録上からわかっていたようだ。

⑨ 爆弾投下跡・小田原・連上寺裏

昭和20年8月13日に、小田原が空襲された。その爆弾投下跡が残っているという情報を聞きつけ、2019年元旦、私は小田原の街を歩いた。戦略上、それほど重要でなかった地方都市・小田原を空襲したことには、疑問が残る。



小田原・爆弾投下の跡  
土塁がえぐられている

海岸に近い浜町二丁目にそれがあつた。土塁がえぐられたように、大きく崩壊している。



途切れた土塁（別角度から、カメラをフェンスの上に乗せ撮影）

上の写真で、右奥の白い建物が新玉小学校だ。当時も小学校（新玉国民学校）がそこにあつた。小田原空襲では、この学校に関係する被害として、若い教員が一人、用務員二人が亡くなった。上空の兵士たちは小

学校を一つの目標にして爆弾を落としたのだろうか。  
（一説に、日本の敗戦が決定的となっていた時期だから、余った爆弾をてきとうに落としたり）

今では、これ以上崩れたりしないように、市がフェンスで囲って立入禁止にしている。土塁は戦国時代に小田原北条氏が築いたもの（天正18年、豊臣秀吉の小田原攻めに対する防御）だし、昭和時代の戦争の傷跡も残していることになるから、ダブルで貴重だろう。

#### ⑩ 洞窟陣地・二宮町・吾妻山

2019年1月3日、私はバスで二宮に出てから、吾妻山に上った。

ここからの眺めはいい。相模湾や富士山がよく見える。ここは公園になっており、子ども用の遊具も備えられている。

『調査記録 二宮の洞窟陣地』\*3によると、吾妻山山頂（136.2m）には、戦時中、防空のための二宮監視哨があった。木造二階建てだった。下の写真に見える展望台の石垣辺りに建てられたものだろう。ただし石垣は後年に築かれたものだろうけど。

二宮防空監視哨が開設されたのは、昭和11年（1936）だ。自衛団のような人たち（ボランティアだ

った）が監視に当たったとある。その当時から防空意識が高かったことになる。昭和18年10月には、空襲が現実味を帯び、軍が引き継いだ。ここでは双眼鏡ぐらゐは備えていたと思うが、人間の目と耳で敵機を見つけようとしたものだ。日本ではレーダーの実用化がそうとうに遅れていたわけだ。



吾妻山山頂（当日撮影）

この日の山頂付近のなだらかな丘には、人出が多かった。ちょうど大学箱根駅伝があり、復路の走りを見物した人たちの一部が登ってきたのかもしれない。冬なのに、山頂の西側に菜の花が咲き誇っていた。吾妻山の名物になっている。

でも、私の第一目的は、吾妻山の洞窟陣地跡を探し当てることだった。「吾妻山西側陣地」と称される、やや大きめの洞窟があるという。場所についておおよその見当をつけていたものの、これまでも探索したが見つけれなかったから、今回は、人に聞くほうが早いと思った。まず公園の管理人に当たってみたが、西側陣地については知らなかった。

山の中腹にある吾妻神社にお参りに来ていた地元の人らしい高齢者に聞いたら、幸い、その場所を知っていた。その教えにより、ようやく見つけることができて、私としては感謝感激だった。そこは、山頂付近から下れば、すぐのところにある（海拔約90m）のだが、ほとんど「けもの道」のようなルートを行く。案内標識もない。冬でもうつそうとした雑木林の中にあるので一般の人は近づかない（近づけない）。

下の写真に見えるように、不審者の横にある倒木は、上から落ちてきたものだから、なんかしらの危険が伴

うものだ。5メートル四方ほどの広さがある洞窟の中は水がたまっていた。



洞窟陣地の入り口  
(前に立つのは、例によって不審者)

奥には狭いトンネルが延びている（長さ約28m）というが、奥に入るのはほとんど不可。これでは、中井町がここを観光の目玉の一つとして売り出すわけに

はいかないのだろう。

陣地というより砲台跡と称したいところだ。相模湾沿岸に上陸しようとする敵軍（連合軍は実際に計画していた）に備えるため、ここに大砲を据え付け、砲撃しようとした。当然、砲口を海側に向けてるように陣地を形成した。



「吾妻山西側陣地」の内部  
水がたまっている

当時無用の長物化していた戦艦長門ながと（もう出動する機会がなかったし、外洋を航行するだけの燃料がなかった）の副砲（四一式14センチ単装カノン砲）を取り外し、その一つをここに据え付けようとしたが、山の上にロープで引つ張り上げているときに、終戦になったという。そんな旧式大砲の一門や二門で連合国軍に対抗しようとしたことに、私は哀れみさえ感じてしまう。

なお、吾妻山には「東側陣地」もあることを私は前述の本で知っていたが、急な斜面の中にあるようで、それらしい痕跡や、近づくためのルートも見つけられなかった。それはあきらめた。

#### 参考資料

- \*1 『海軍戦闘機列伝』横山保ほか、光人社
- \*2 『飛行機銘銘伝 第一巻(天の巻)』秋本実、光人社
- \*3 『調査記録 二宮の洞窟陣地』（戦時下の二宮を記録する会・2012年12月8日発行）



## 江ノ島にて

盛丘 由樹年

2019年2月24日(日)、久しぶりに江ノ島に行った。藤沢駅から歩き、途中、いくつかの見所を回っていた私は、この辺の名所のひとつ、龍口寺にも寄ってきたばかりだった。長く歩いてきたので腹ごしらえのために、道沿いにあったコンビニエンス・ストアによってパン類を買った。片瀬海岸に出て、江ノ島の橋の近くの東浜のコンクリート護岸に座り、それを食べることにした。目の前には広い砂浜が広がり、遠くに海でサーフィンをする人が何人かいた。風が強めだったが、天気はよく晴れていた。春が来たかのようにだった。ちょうど観光びよりだった。

そんな景色を見ながら、私は食べ始めた。一つ目は、中にホイップクリームの入った菓子パンだった。一かじり二かじりすると、甘くておいしい。それを手にしたまま、ふと目を放した。すぐ耳の近くで「ブン」という風が吹く音がした。何の音かと思うとともに、左手を見ると、手にしていたはずのパンが消えていた。

「あれっ？」

トンビにパンをさらわれたのだ。すぐにそれを理解した。ただし、それは後ろから飛んできて、さっと飛び去ったため、私にはそれがトンビかどうかの確認をする暇もなかった。トンビの仕業に違いなかった。あの音は羽ばたきだったわけだ。

実は、この辺にはあちこちに「トンビに注意」の看板がいくつもあるのに気づいていた。そして片瀬海岸の上空には、10羽以上のトンビが飛びまわっていた。トンビは肉食、あるいは魚食であって、パンを食べないだろうと思っていたから、私は無警戒だった。そういえば、カラスもパンを食べる……。トンビも雑食性ということになる。観光客の弁当など、彼らの好物になっているに違いない。この上空を飛んでいるのは、人の食物の味をしめているトンビたちなのだろう。トンビにアブラゲをさらわれたという話もあることだし、手に持ったパンをさらってゆくとは、なんと熟練しているトンビだろうか。みごとに早業はやわざだった。感心してしまう。パンをとられるだけならいいが、鋭い爪で手指を引っかかれ、けがをすることもあると注意書きにあるから、私は少々恐怖を感じ、ここで昼食をとるのはあきらめ、退散することにした。

橋を渡って江ノ島に来た。ちょうど日曜日だったせ

いもあり、江ノ島は観光客でいっぱいだった。特に中国系の人が目立った。道沿いの食べ物屋は大繁盛だった。今日の私の目的は、橋を渡ってすぐ左手にある公園で「世界女性群像噴水池」を見ることだった。たいした目的ではないから、藤沢市のいくつかの観光名所を見て回ることの抱き合わせで、この芸術作品を見る旅程にした。円形の噴水池の中には、ほぼ等身大のブロンズ像が七体ほどある。広報紙にあった野外彫刻に関する情報のとおり、なかなかよかった。肉感的な女性像もあって、よくできている。

私は噴水池周辺の草地に座り込み、残りのパンを食べ始めた。空にトンビがいないことを確かめてから。



江ノ島の世界女性群像噴水池の前で